

# 緩和ケアからみたIVRの役割

---

国立がん研究センター中央病院  
緩和医療科・緩和ケアチーム  
里見絵理子

2014年12月10日



▶ 当院の緩和ケア

▶ 緩和ケアとIVR



# 国立がん研究センター中央病院 緩和ケアチーム

- 1999年設立 多職種での緩和ケア支援をしている
- 構成メンバー  
緩和医療科医師・精神腫瘍科医師・認定看護師・薬剤師  
心理療法士・鍼灸師・Hospital play staff (HPS)

## 依頼項目

1. 身体症状の緩和
2. 精神症状の緩和・心理的な支援
3. 家族支援（配偶者、子どもなど）
4. 療養支援
5. 自己決定支援

etc



# がん患者に必要な緩和ケア支援



# がん患者さんを悩ます主な身体症状

痛み

悪心嘔吐

息苦しさ

腹部膨満感

浮腫



# 身体症状緩和の方法

特にIVRは、薬物療法で緩和の難しい苦痛も低侵襲で速やかに緩和可能。  
原因にアプローチできることから薬物療法も最小限に抑えることができる

## 薬物療法

(対症療法)

## 非薬物療法

手術  
放射線治療  
IVR  
神経ブロック  
ケア  
リハビリ  
etc



# がん疼痛緩和の方法

## 薬物療法

麻薬性鎮痛薬 (モルヒネなど)

非麻薬性鎮痛薬

鎮痛補助薬

副腎皮質ステロイド

ビスフォスフォネート

## 非薬物療法

IVR

放射線治療

神経ブロック

整形外科的手術

ケア

装具 (コルセットなど)

リハビリ

etc



▶ 当院の緩和ケア

▶ 緩和ケアとIVR





## Case 60代男性 大腸がん多発骨転移 がん疼痛

外来で化学療法を実施していたが、多発骨転移をきたし、耐え難い痛みのために入院した。

脊椎転移の疼痛コントロール目的に緩和ケアチーム介入依頼。



# Case 60代男性 大腸がん多発骨転移 がん疼痛

医療用麻薬の使用開始→痛みに合わせて増量

安静時痛は緩和

鎮痛薬の副作用である「眠気」出現

寝返りのたびに疼痛出現

動作痛のため寝たきり状態

食事、排せつはベッド上で行った

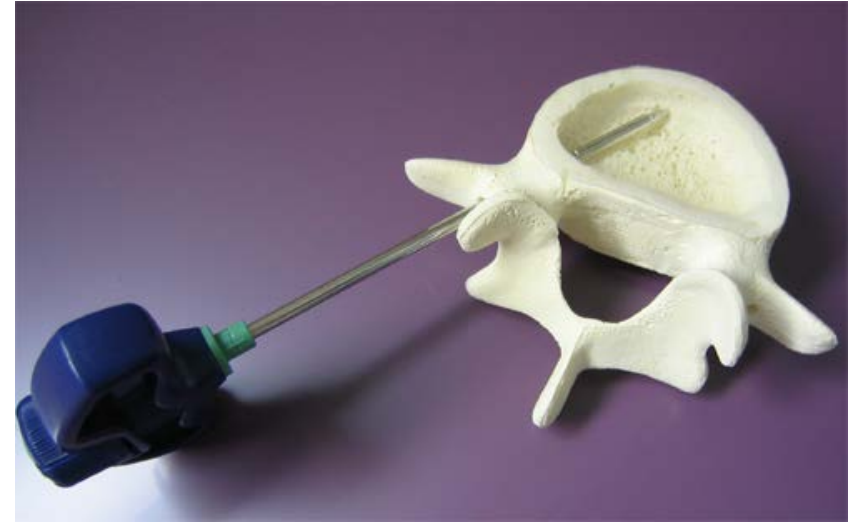
気持ちが落ち込み、抑うつ的であった

IVRで症状緩和を実施した



Case 60代男性 大腸がん多発骨転移 がん疼痛

椎体形成術 実施  
(骨セメント)

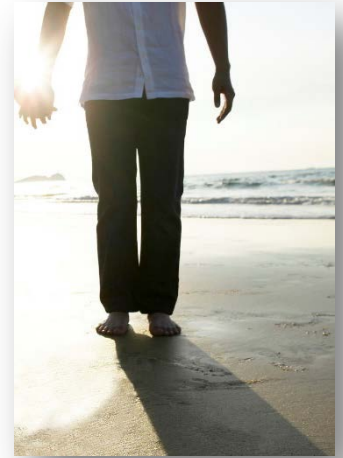


# Case 60代男性 大腸がん多発骨転移 がん疼痛

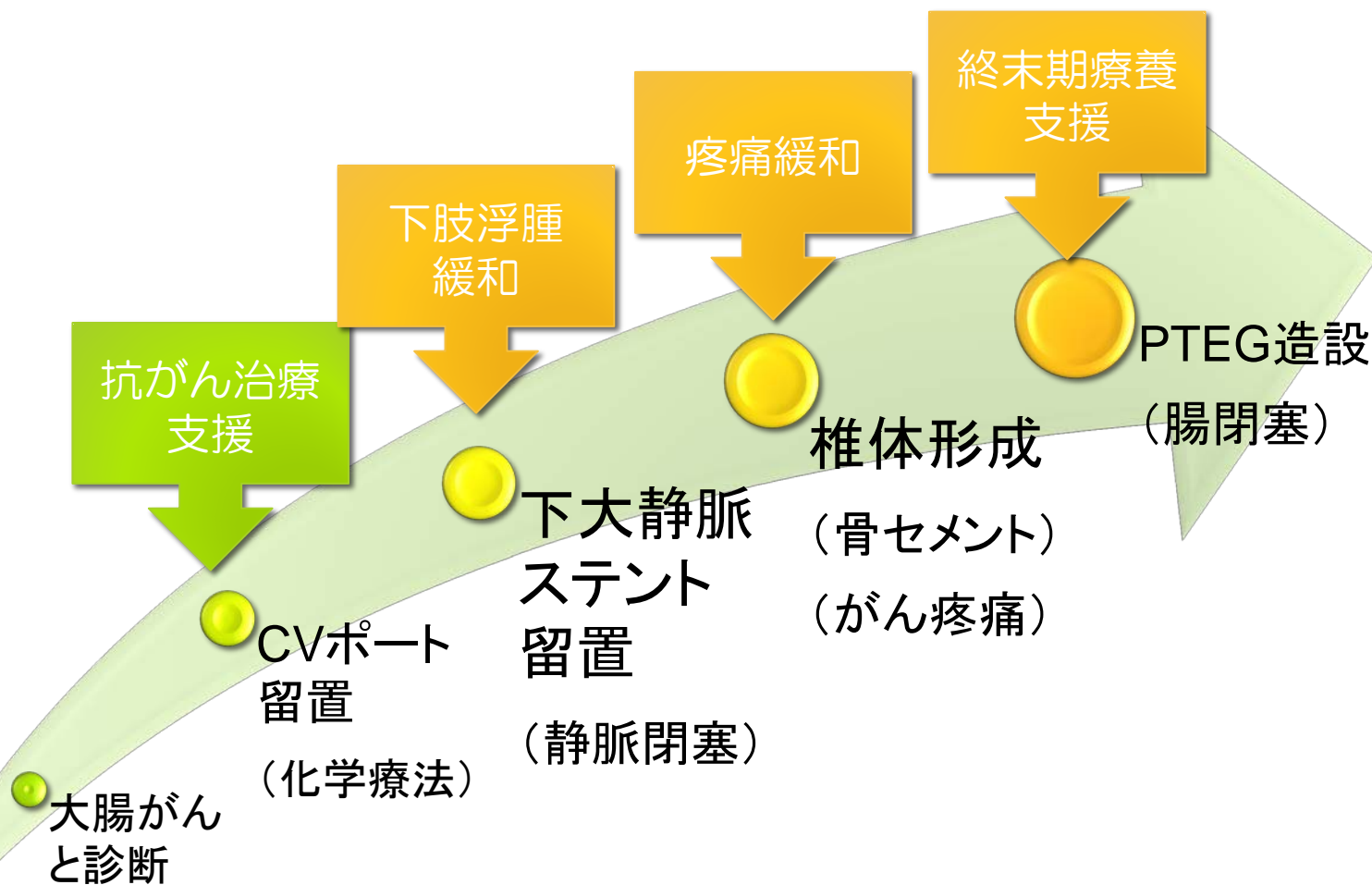
IVRで椎体形成術（骨セメント）実施後  
より動作時疼痛が緩和

麻薬性鎮痛薬オキシコドンは一日当たり  
240mgから40mgまで減量し、眠気も消失

歩行可能になり日常生活に支障はなし  
社会復帰し、外来で抗がん治療を再開した



# Case 60代男性 大腸がん多発骨転移 がん疼痛



診断・治療期から終末期までIVRで症状緩和が可能

# がん患者さんを悩ます主な身体症状とIVR

痛み

悪心嘔吐

息苦しさ

腹部膨満感

浮腫



# がん緩和ケアとIVR

骨セメント

悪性腸閉塞  
PTEG

各種  
ステント

デンバー  
シャント

ラジオ波  
焼灼

CVポート

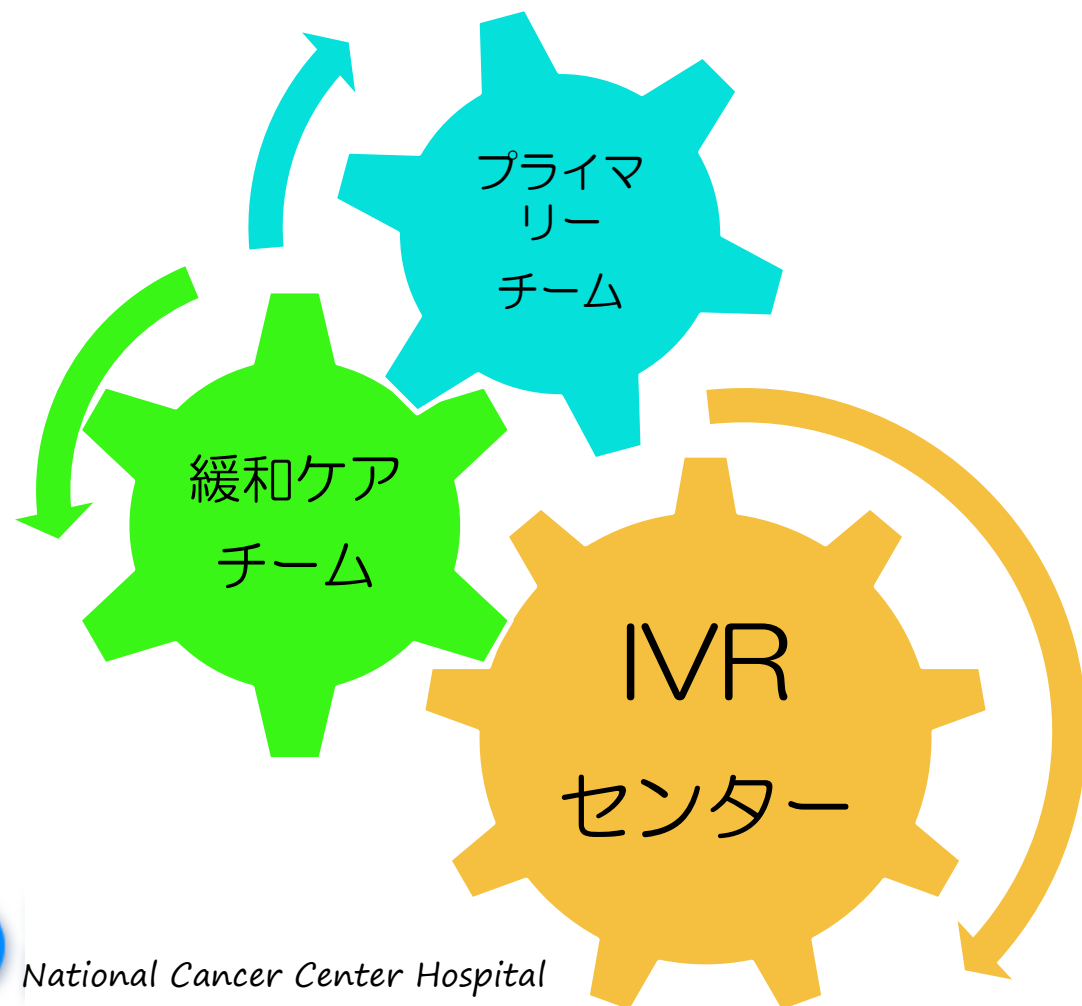
IVRによるエビデンスはJIVROSGから継続して発信されておりより良い緩和医療を患者に提供する上で信頼性が高い

当IVRセンターが日本から緩和医療におけるIVRを標準治療とするエビデンスの発信の拠点になることが期待される



# 症状緩和と連携

国立がん研究センター中央病院では「IVRセンター」と緩和ケアチームが連携して症状緩和を行います





# IVRセンター発足にあたり緩和医療の立場から

- ▶ 薬物療法で効きにくい苦痛に対して、IVRは患者に速やかな症状緩和とQOLの改善を提供する有用な手段といえます
- ▶ しかし、オンコロジスト、緩和ケア医が症状緩和法の一つとしてIVRを十分に活用しているとは言い難く、IVRセンター発足によって全国の医療者を通じて一人でも多くのがん患者さんがIVRの恩恵を受け、苦痛からの緩和につながると確信します
- ▶ 緩和医療におけるIVRのエビデンスを含め国立がん研究センター中央病院IVRセンターから日本、そして世界に向かって多くの情報を発信していくことを期待します

